佐藤屋プロジェクト 結成10年記念誌

奥州街道

大河原宿と金ケ瀬宿

旧韮神橋

発刊にあたって

私ども佐藤屋プロジェクトは、佐藤屋邸を拠点として邸宅や庭の素晴らしさを多くの人達に知っていただくと共に、事業を通して町の文化の向上と活性に資することを目的に作られたボランティアサークルです。

平成30年度の企画展では、戊辰戦争150年目の節目に当たることから「戊辰戦争と大河原」をテーマにしたパネル展示と講演会を開催しました。更に令和元年度には「大河原の奥州街道」と、2年続けて大河原の江戸時代あたりの歴史をテーマにしました。

町内の文化遺産、中でも古文書類の少なさを指摘されてきましたが、この機会に町内の家々を訪れて調査してみると、まだ知られていない文書や実物に出合うことができました。特に街道沿いの旅籠の建物の部品や調度品、旅する時のかっぱや参勤交代時に藩主が泊まった時の宿札もありました。町史など町がこれまで発刊した本の内容にこれらを位置づけながらパネルにしたものを邸内の各部屋に展示しました。内容的に充実した企画展になり多くの皆様にお出でいただき、真剣に見ていただくと共にご指導をいただいたことも多く、私達にとって収穫の多い機会となりました。

佐藤屋プロジェクト発足10年目に当たり、これまで調査したことやご指導いただいたことを基にして、この度「奥州街道　大河原宿と金ケ瀬宿」と題して冊子にまとめるべく鋭意取り組んできました。おかげさまでどうにか発刊の運びとなった次第です。多くの町民の皆様はもとより、町外の方々にもこの冊子を手に取っていただき、大河原の昔を知っていただきたいと思います。そしてこの町に少しでも愛着を持っていただければ幸いです。更にこれを機会に、町の歴史的文化遺産を町の発展にどのように生かしていけばいいのかに思いを馳せていただけたら、この冊子の発行という一粒の種が発芽し、大きく成長するかも知れません。

このような夢を持って当会の会員22名は、これからも 地域文化の向上に寄与する活動を目指して参りますので、ご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、資料を提供していただいた方々をはじめ、発刊にご協力をいただきました多くの皆様に心から御礼を申しあげます。

令和2年3月

佐藤屋プロジェクト
会長 渡 辺　常 男

「奥州街道 大河原宿と金ケ瀬宿」について

江戸時代に入って幕府は、軍事、物流および参勤交代のため適当な間隔に宿場を置いて、各宿場に人足と荷駄用の馬（伝馬）を一定数常備させ荷物運搬にあたらせ街道を整備しました。

中でも重要な道路とされたのが江戸と京都を結ぶ東海道など五つの道路（五街道）でした。その中の一つが江戸日本橋と福島の白河を結ぶ奥州街道でしたが、白河以北、青森の三厩までをその延長として奥州街道と呼んでいます。

全長約900キロ、約100の宿場がありますが、江戸から数えて金ケ瀬宿は62番目、大河原宿は63番目の宿場でした。

大河原宿と金ケ瀬宿は、現在の宮城県大河原町にありました。

この冊子は、大河原町の大河原宿と金ケ瀬宿の奥州街道沿いの歴史と様子を紹介したものです。

Preface

In the Edo period, Bakufu (the Government) set up Kaido (roads) and Syuku (camps) at appropriate intervals for military, logistics, and for government officials traveling through the area. Each Syuku was provided with a fixed number of workers and horses to carry luggage. Syuku was a town where many inns for tourists were built.

The Osyu Kaido was one of the five routes of the Edo period. It was built to connect Edo (Tokyo) with Mutsu Province (Tohoku area, Northeast Japan) and Shirakawa, Fukushima Prefecture, Japan. The routes continues from Shirakawa to North, to Aomori, and we normally call the whole route from Tokyo to Aomori as Osyu Kaido. The route is currently almost the same as that of National route No.4, and Tohoku Express way.

Osyu Kaido passed through Ogawara, and Ogawara-syuku and Kanagase-syuku was located in the current Ogawara-machi (town).

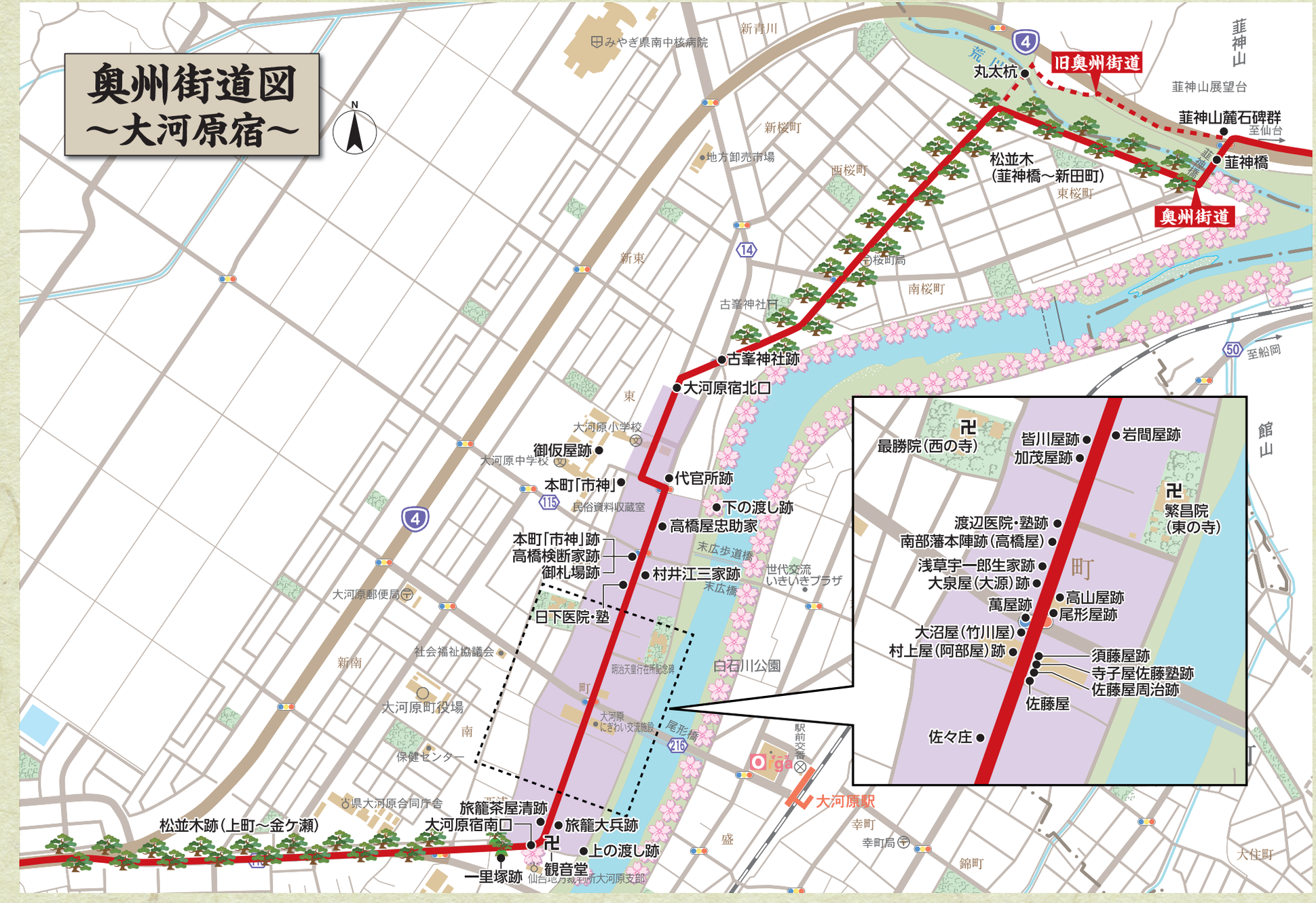
This leaflet introduces the history of Ogawara-syuku and Kanagase-syuku and their relation to Osyu Kaido.

目　次

発刊にあたって
「奥州街道 大河原宿と金ケ瀬宿」について
奥州街道図～大河原宿～ …… 1
１.新田町周辺［韮神山から大河原宿北口まで］ …… 2
⑴ 韮神山麓石碑群
⑵ 韮神橋
⑶ 松並木跡（韮神橋～新田町）
⑷ 古峯神社（足尾山）
⑸ 大河原宿北口
２.本町周辺［行政の中心地］ …… 5
⑴ 代官所跡
⑵ 御仮屋跡
⑶ 下の渡し跡
⑷ 高橋屋忠助家
⑸ 高橋検断家跡
⑹ 御札場跡
⑺ 本町「市神」
⑻ 村井江三家跡
⑼ 日下医院・塾
⑽ 岩間屋跡
⑾ 皆川屋跡
⑿ 加茂屋跡
⒀ 南部藩本陣（駒板屋）
⒁ 繁昌院（東の寺）
⒂ 最勝院（西の寺）
３.中町周辺［旅人で賑わった宿屋街］ …… 10
⑴ 渡辺医院・塾跡
⑵ 南部藩本陣跡（高橋屋）
⑶ 浅草宇一郎生家跡
⑷ 大泉屋（大源）跡
⑸ 高山屋跡
⑹ 尾形屋跡
４.中央公民館周辺［豪商で活気のあったところ］ …… 13
⑴ 萬屋跡
⑵ 大沼屋（竹川屋）
⑶ 村上屋跡（阿部屋）
⑷ 須藤屋跡
⑸ 寺子屋佐藤塾跡
⑸ 佐藤屋周治跡（佐周商店）
⑺ 佐藤屋

５.観音堂周辺［史跡の多い街道の南口］……15
⑴ 佐々庄
⑵ 旅籠茶屋清跡
⑶ 旅籠大兵跡
⑷ 大河原宿南口
⑸ 観音堂
⑹ 上の渡し跡
⑺ 一里塚跡
⑻ 松並木跡（上町～金ケ瀬）
奥州街道図～金ケ瀬宿～……18
６.金ケ瀬下（新町）地区［宿駅の役割を担った平村の移住］……19
⑴ 薬師堂（板碑群）
⑵ 大高山神社への道標
⑶ 香林寺
⑷ 金ケ瀬新町の宿駅の役割
⑸ 高橋検断家跡（新町）
⑹ 金ケ瀬宿と平村
７.金ケ瀬上（本町）地区［金ケ瀬の地名に由来する地域］……21
⑴ 金ケ瀬宿の成り立ち
⑵ 検断鈴木弥五右エ門彰徳碑
⑶ お笛田
⑷ 明増寺
⑸ 山家家（明治天皇の御小休所）
８.金ヶ瀬郡境［村境の史跡］……23
⑴ 大高山神社
⑵ 藤原忠衡寄進の鉄九輪塔
⑶ 小豆坂
⑷ 里程標
⑸ 籠石
⑹ 宝匡印塔跡
資料編……25
⑴ 大河原の戊辰戦争の様子
⑵ 浅草宇一郎（戊辰戦争に関わった大河原出身の目明し）
⑶ 宿場町の役割と役人
⑷ 神社境内の石碑
⑸ 庶民を襲った災害
⑹ 村の契約講
⑺ 仙南地方の紅花栽培
登録有形文化財佐藤家住宅について……32
佐藤屋プロジェクト紹介……33
あとがき

奥州街道図
～大河原宿～


N
みやぎ県南中核病院
新青川
新桜町
地方卸売市場
西桜町
東桜町
南桜町
桜町局
新東
東
古峯神社
古峯神社跡
大河原宿北口
大河原小学校
御仮屋跡
大河原中学校
本町「市神」
民俗資料収蔵室
代官所跡
下の渡し跡
高橋屋忠助家
本町「市神」跡
高橋検断家跡
御札場跡
村井江三家跡
末広歩道橋
末広橋
世代交流いきいきプラザ
日下医院・塾
大河原郵便局
社会福祉協議会
新南
大河原町役場
南
保健センター
県大河原合同庁舎
白石川公園
明治天皇行在所記念碑
町
大河原にぎわい交流施設
尾形橋
駅前交番
大河原駅
旅籠茶屋清跡
大河原宿南口
旅籠大兵跡
上の渡し跡
観音堂
一里塚跡
仙台地方気象台大河原支部
松並木跡（上町～金ケ瀬）
盛
幸町
幸町局
錦町
大住町
館山
至船岡
荒川
旧奥州街道
丸太杭
松並木
（韮神橋～新田町）
奥州街道
韮神橋
韮神山
韮神山展望台
韮神山麓石碑群
至仙台
最勝院（西の寺）
皆川屋跡
加茂屋跡
岩間屋跡
繁昌院
（東の寺）
渡辺医院・塾跡
南部藩本陣跡（高橋屋）
浅草宇一郎生家跡
大泉屋（大源）跡
町
高山屋跡
萬屋跡
尾形屋跡
大沼屋（竹川屋）
村上屋（阿部屋）跡
須藤屋跡
寺子屋佐藤塾跡
佐藤屋周治跡
佐藤屋
佐々庄

1 新田町周辺［韮神山から大河原宿北口まで］
Around Shinden-machi (from Niragami-yama mountain to Ogawara-syuku North)

昔から大河原宿の人々から崇拝されていた韮神山のふもとから、韮神橋を渡りうっそうとした松並の街道をぬけ古峯神社の前を通ると大河原宿の北口になります。新田町は旅人の旅籠が多いところでした。

From Sendai to Edo (Tokyo), Osyu Kaido passed the foot of Niragami-yama mountain, which has been worshiped by people in Ogawara, and continued through the row of pine trees and reached the North entrance of Ogawara-syuku.

(1) 韮神山麓石碑群 Niragami-yama mountain-foot stone monument group

船迫宿からしばらく来ると右手に大きな岩山が見えます。これが韮神山です。奥州街道を往来する旅人は、この山を見てその景観に感嘆の声をあげ、古今から道中記に紹介された場所です。また韮神山ふもと付近には「憚りの関」があったと伝えられています。

① 藤原実方(さねかた)の句碑（憚(はばかり)りの関）
FUJIWARA Sanekata's (famous poet) monument

平安（古今集後）の歌人として著名な藤原実方陸奥守が柴田郡に足を運び、憚りの関（「はらからの関」とも言われています。）にさしかかり「やすらわで思いたちにし東路にありけるものをはばかりの関」と詠んだと言われています。（「後拾遺和歌集」）後年藤原秀衡がこの歌碑を韮神山のふもとに立てたとありますが現在遺っている歌碑は万治元(1658)年２月のもので、歌詞も「みちのくのありけるものを憚りの関」となって頼朝の作と伝わっています。（柴田郡誌）

韮神山麓石碑群

② 芭蕉の句碑 Basho's (Famous poet) monument

「鶯の笠おとしたる椿かな」

芭蕉の故郷三重県の上野で詠んだもので、韮神山の風景に最もふさわしい句として弘化３(1846)年に大河原町の俳人村井江三が建てたものです。

③ 三十三観音・遷大非閣之碑

Thirty-three Kannon (33 Gods) and Sendaihikaku Monument

大河原宿新田町の大泉屋万吉が西国三十三観音に巡礼して砂をあつめて持ち帰り、韮神山に埋めて三十三観音を祭ろうとしました。しかし万吉が旅の途中で亡くなったので、息子の初吉が遺志を継ぎ、韮神山頂から麓に三十三観音を建てました。この万吉・初吉二代に亘る篤志を顕彰したのが、遷大悲閣之碑です。

遷大悲閣之碑　　韮神山頂に残る三十三観音

沼辺村史にのっている韮神山全景　　バイパス工事で切り取られる前の韮神山

(2) 韮神橋 Niragami Bridge

芭蕉の通った元禄２(1689) 年の頃は、新田町から東進してきた街道は荒川にさしかかりまっすぐ「にらかみ橋」を渡り、韮神坂を通り立石に至りました。安永 (1772) の頃にはその下流の現在の場所に「韮神橋」が架け替えられました。

旧韮神橋　　荒川の中にある丸太杭は旧街道の橋脚でないかと言われています

(3) 松並木跡（韮神橋～新田町）Row of pine trees（Niragami-bridge to Shinden-machi）

戦前まで松並木のあった奥州街道は、新田町外れから東進し、荒川にさしかかるところで右折して川沿いを下ること500mほどの所に橋があり、橋際までうっそうとした松並木の街道でした。

街道の旧松並木と蔵王山
（現在の東桜町地区から）

コラム 松根油

松の幹回りが2mにも達した太平洋戦争終末期の昭和20（1945）年頃に、資材用や戦闘機用燃料としての松根油（テレピン油）を採取のため、松並木が根こそぎ伐採されその命運を閉じました。ただし、その松根油は使われないまま敗戦を迎えたと言われています。

(4) 古峯神社（足尾山）Furumine Shrine（Mt. Ashio）

境内には19の古碑が建ち並んでいます。「金剛山」天保６（1835）年乙未を最大に安永、天保、嘉永年代の建碑が大半を占めています。建っていた場所は大河原宿場の北口の小高い丘のためか馬頭観世観音が9基も建ち、伝馬業者の名も彫られています。昭和55年12月、道路付替工事によって、西桜の新田町生活センター隣りに移転しました。寛延4（1751）年の増補行程記には「山神」と記されています。

新田町生活センター隣りの現在の古峯神社

移転前の古峯神社

(5) 大河原宿北口
Ogawara-syuku North Entrance

大河原宿の北の木戸は新田町にありました。旅人の旅籠が多かったと言われています。

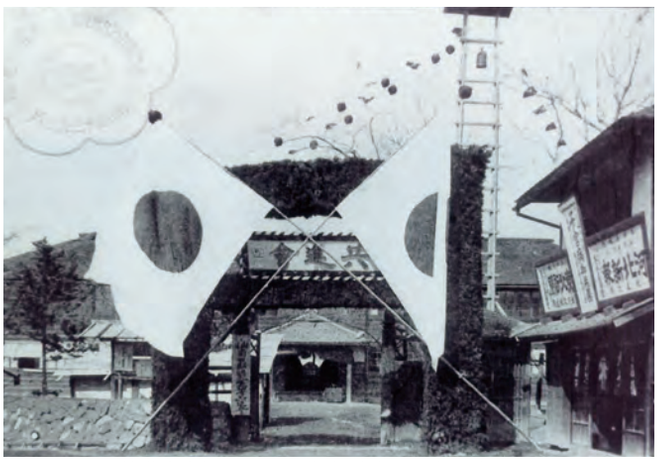
❷ 本町周辺［行政の中心地］
Around Moto-machi (the administrative center)

奥州街道は新田町をぬけ、現在の大河原小学校のグランドを横切り、突き当りを左折して「イズミヤ商店」の所で右折して本町通りから繁昌院・最勝院の前に向いました。この地域には、代官所・御仮屋があり大肝入、検断が住む行政の中心地でした。

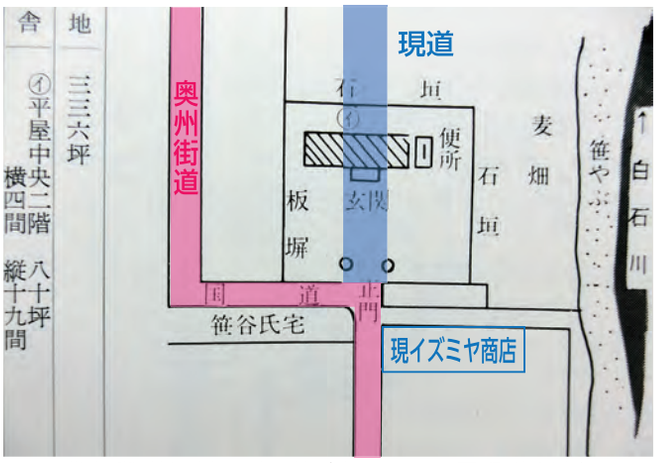
Osyu Kaido crossed Shinden-machi, crossed the current Ogawara Elementary School ground, turned left at the end, then turned right at "Izmi-ya Shoten" and headed from Moto-machi Dori (street) to the front of Hansho-in temple and Saisho-in temple.
There were government offices in this area, and it was the administrative center where officials in the local government lived.

(1) 代官所跡
The site of Daikan-syo (Main local government office)

藩の郡奉行の命令を受けて郡村の庶民を直接支配するのが代官でした。
その領地内に住む庶民（農工商）は藩主の民であり、代官の支配をうけていました。
代官は2郡に1人がおかれ大肝入会所で政務をとり、会所は俗に代官所と呼ばれ、所在は現在の大河原小学校東南部にありました。



共進会会場となった代官所跡（明治43年3月）



代官所跡地に大河原小学校が建設された図面（明治11年）
大正７年の大火で道の付け替えをしています。

(2) 御仮屋跡

The site of Okari-ya (Facility for a short stay)

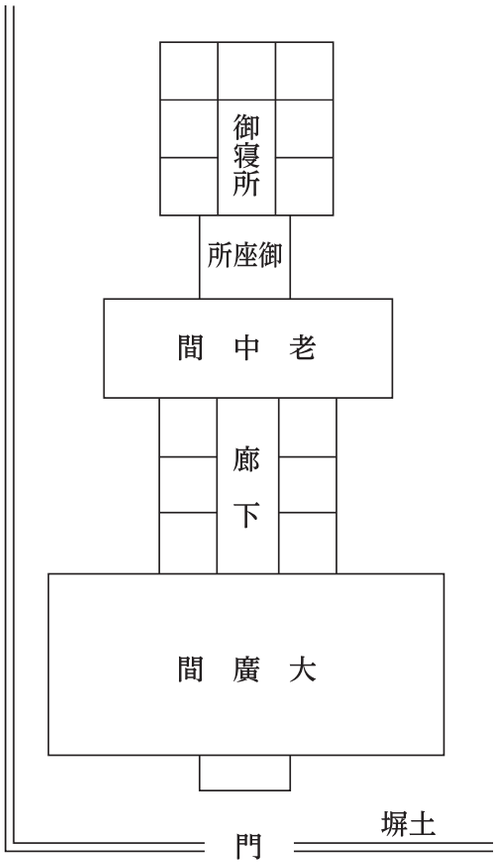
御仮屋とは、江戸時代仙台藩主の休泊所に使った施設で領内の主要箇所に設けられていましたが、特に、参勤交代（概ね７泊８日）の奥州街道の宿駅には欠かせない施設でした。お泊りになる宿駅の御仮屋は、念を入れた施設であったようで御殿とも言われる豪壮な構えであったと言われています。

藩主の行列はほぼ700人位で、そのうち200人位は御仮屋に泊まり、そのほかは民家に割当てられたようです。

この大河原御仮屋の場所は、現在の大河原小学校西校舎付近です。

御仮屋跡

御仮屋で使われていた御膳（伊東家所蔵）



御仮屋の間取図（柴田郡誌）

(3) 下の渡し跡

The site of the lower pier of a ferryboat crossing Shiroishi river.

白石川に架橋がなかった時代、対岸大谷村との交通はすべて渡船でした。大河原には２箇所の渡船場がありました。下の渡しは大河原から船岡へ目指す近道であり、同時に百姓の作場渡し（耕作道）で上の渡しの補助的な役割を果たすものです。下の渡しは「イズミヤ横丁」から川原に抜けたところで大谷村の下川原に渡るものでした。

「イズミヤ商店」から下の渡しにぬける横丁

(4) 高橋屋忠助家
The site of Takahashi-ya Tyusuke

文化、文政時代から紅花や穀類を江戸から京まで出荷した江戸後期の商家で大肝入、検断等の公職も兼ねた素封家でした。安政年間には御国産紅花差配人（仙台城下、金成、大河原の3ケ所）の資格が付与され、仙南の紅花を一手に取り引きし、「上判取」という最高税額を納入した実績を持つ商家でした。

鹽竈神社の表坂の燈籠寄進者名に「高橋屋忠助」の名前が載っています。店舗は明治初期まで現在地の西側の向いにありました。

現在の高橋家

(5) 高橋検断家跡
The site of Takahashi Inspection House

高橋兵右ェ門家は、古くから本町の検断職を世襲した家柄です。

検断とは、町場や宿駅のあるところに置かれ、主として駅内の取締りと、藩士や諸士通行の継ぎの人夫や伝馬の手配を行ないました。また、米の密輸を取り締まったり、駅内の諸届願書を大肝入に進達したり、旅人の監視、罪人の護送手伝いなどの仕事をしました。諸荷物を他村に送るには、必ず検断の検査及び送り状が必要でした。

大河原宿は奥州街道の宿駅でしたので、検断が置かれ、最初の頃は１名でしたが、後は複数になりました。

高橋検断家跡

(6) 御札場跡
The site of the official announcement board

御札場は藩からの通達の御布令（おふれ）禁制のほか、宿場のお定めや駄賃表、はては重罪人の手配書まで、いわゆる高札を掲示する場所でした。

御札場はどのあたりか、明らかな記録はありませんが、大河原町場の中央、検断高橋兵右ェ門宅（今の玉山食堂、本田呉服店）前と言われています。

大河原の大谷村肝入宅にあった御札

(7) 本町「市神」
Moto-machi "Ichi-gami" Market God

町場には商売をする一定の市日がきめられていました、指定の場所で他の町場からも商人が集まって商取引がおこなわれました。この市の開かれる広場には商売の幸を与えるという「市神」が祭られました。本町の市神は現在西町の本田宅にありますが玉山食堂辺りにあったものを移したと言われています。

本田宅（字西町）の市神

(8) 村井江三家跡

The site of MURAI Kozan's house

江三（こうざん）は天保から安政にかけて藩内俳壇を代表する郷土俳人です。江三、名は兵治、一日庵江三と号しました。寺子屋も営んでいました。

江三が俳句界に進出して著名になるのは文政のころ諸国を行脚、文人墨客と交わり修行して帰国した後のことでした。江三は芭蕉を慕って、寂（さび）を追求しました。

韮神山麓旧奥州街道に弘化3(1846)年に「鶯の笠おとしたる椿かな」の芭蕉の句碑を建てました。

村井江三家跡

(9) 日下医院・塾

Kusaka Clinic/ Private school

船岡城主柴田家の御殿医を勤め文化5(1808)年から明治元(1868)年まで寺子屋も営んでいました。
藩政時代には中町の西裏通りに面したところにあり、明治元年の調査では男子50人女子10人の生徒がいました。

現在の日下医院

(10) 岩間屋跡

The site of Iwama-ya

幕末から明治にかけて三代（庄蔵・十蔵・庄太郎）にわたって大河原の肝入を勤めた家柄で、紅花等の問屋を営んで居ました。

鹽竈神社の表坂の燈籠寄進者に「岩間屋庄蔵」の名前が載っています。

岩間屋跡

(11) 皆川屋跡

The site of Minagawa-ya

穀物問屋を営んでいました。正徳2(1712)年、本町皆川屋勘平の名で大高山神社へ絵馬が奉納されています。

皆川屋跡

(12) 加茂屋跡
The site of Kamo-ya

天保から安政にかけて二代（庄太郎・庄十郎）にわたり大肝入を勤めていた家柄です。
紅花問屋を営んでいました。

加茂屋跡

(13) 南部藩本陣（駒板屋）
Nanbu-han（domain）Honjin（Main inn）
Komaita-ya

南部藩で作った増補行程記に本陣と記されていますが、現在のどの辺にあったか不明です。

コラム 参勤交代見物

「参勤交代の行列は大河原、金ケ瀬ともに街道中央に中堀があったので、上り下りとも西側を通るのが通例でした。近村の老若男女は弁当持参でこの行列を見物にきたという。」という記述があり、中堀の東側通路での行列見物を娯楽の1つと考えると当時の庶民に親しみを覚えます。

(14) 繁昌院（東の寺）
Hansho-in Temple (East Temple)

宗　派：曹洞宗
開　山：慶長10(1605)年
本　寺：村田町龍島院
山門額・本堂額：山岡鉄舟書
宝　物：阿弥陀如来像（平安時代の作と言われています。）
　　町指定重要文化財

江戸時代から、奥州街道を隔てて、東西に繁昌院、最勝院の両寺院が向かい合っていました。創建の頃は、両寺院とも上町の西浦に隣あって建立されていましたが、正徳３年(1713)大火により焼失したため、40年後に現在地に移転再建しました。

繁昌院西山門

(15) 最勝院（西の寺）
Saisyo-in Temple (West temple)

宗　派：真言宗智山派
開　山：寛永2(1625)年
本　寺：蔵王町宮蓮蔵寺

創基は天正年間(1580年代)と伝えられ、その場所も上町の西浦にあったといわれています。
はじめは宮の蓮蔵寺住職が檀家の要請に応じた祈祷所でしたが、寛永2年、この蓮蔵寺の第4世 実専が晩年この最勝院に隠居し中興開山しました。

最勝院山門

❸ 中町周辺［旅人で賑わった宿屋街］
Around Naka-machi（an inn street full of tourists）

繁昌院・最勝院前を過ぎると現在の中町になります。旅籠の多い地域で旅人でにぎわっていました。仙台藩最後の藩主 伊達慶邦が会津藩討伐の際に宿陣し、また明治天皇の御昼休所になった高山屋があったところです。

Osyu Kaido passed in front of Hansho-in temple and Saisho-in located in Naka-machi. Some hatago (inn) located in this area and it was crowded with many tourists. This is the location of Takayama-ya, where the last lord of the Date clan in Sendai, Date Yoshikuni stayed on his way to Aizu battle, and also the Meiji Emperor took a lunch break in this site.

(1) 渡辺医院・塾跡
Watanabe Clinic /The site of Cram School

船岡城主柴田家の御殿医を勤め安政（1854）から明治まで寺子屋も営んでいました。生徒数は不明です。

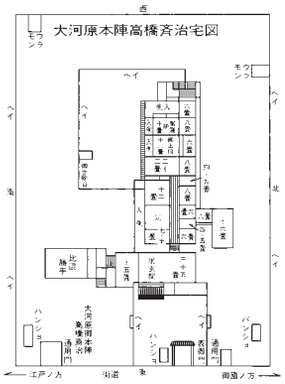
渡辺医院跡

(2) 南部藩本陣跡（高橋屋）The site of Nanbu-han(domain) Honjin(Main inn)(Takahashi-ya)

天保（1830～1844）のころに南部藩本陣をつとめた高橋斉治（子孫は後に高城を名のる）宅図が残っています。南部藩の記録によれば駒板屋・阿部屋丹治（村上）の名が見え本陣か脇本陣をつとめたことがうかがえます。

南部藩本陣跡

南部藩本陣の宿札（伊藤俊明氏所蔵）



高橋斉治宅図

(3) 浅草宇一郎生家跡
The site of ASAKUSA Uichiro's birth place

宇一郎は大河原生まれの福島の目明しで、戊辰戦争で奥羽鎮撫総督府下参謀世良修蔵捕縛事件に関わりました。生家は旅籠を営んでいました。（墓は最勝院、福島市長楽寺）

浅草宇一郎生家跡

(4) 大泉屋(大源)跡
The site of Oizumi-ya (Daigen)

藩政時代は味噌、醤油製造を営み明治になってから金銭貸付、不動産売買を営んでいます。鹽竈神社の表坂の燈籠寄進者に「大泉屋源十郎」の名前が載っています。

大泉屋跡

(5) 高山屋跡 The site of Takayama-ya

仙台藩主の宿舎として旅館高山屋を本陣として使用されたこともありました。

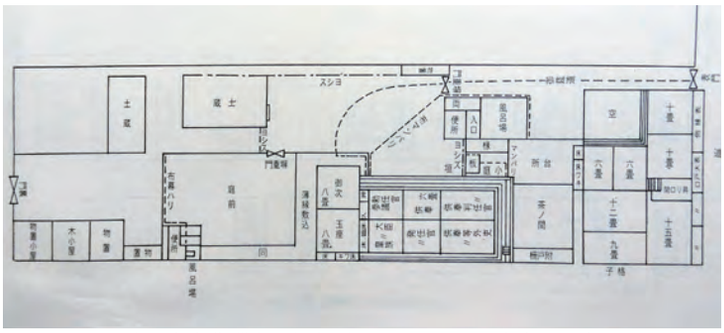
慶應4(1868)年４月11日仙台藩は会津藩の討伐軍、将兵3,230人を率いて大河原宿に泊まりました。その際、最後の仙台藩主 伊達慶邦は高山屋に宿陣しました。

また、明治9年、14年の明治天皇の東北御巡幸の御昼休所になりました。

鹽竈神社の表坂の燈籠寄進者に「高山屋庄吉」の名前が載っています。

大正12年4月故郷を思い白石川の堤防に桜樹1,000本を町に寄付し、後世の桜並木「一目千本さくら」を残した高山開治郎の生家です。

高山屋跡


明治天皇東北巡幸の行在所になったときの高山屋居宅図

明治９(1876) 年明治天皇が初めて「東北巡幸」の際、高山屋が行在所(あんざいしょ)になった時の看板（尾形順一郎氏所蔵）

明治天皇行在所記念碑　高山開治郎が高山屋に昭和3年に建立（現在は繁昌院山門前に移転になりました。）

(6) 尾形屋跡 The site of Ogata-ya

尾形屋安兵衛は弘化2(1845)年の頃一郡一軒の清酒の営業株を取得し酒造業を営んでいました。さらに明治期には東北初のガラスびん詰酒「梅が香」で繁昌しました。

鹽竈神社の表坂の燈籠寄進者に「尾形屋政治」の名前が載っています。

明治期に東北本線開通時に大河原駅誘致、また尾形橋の架橋、尾形丁の開設に尽力した初代尾形安平の家があった所です。

尾形屋跡

尾形橋の東側に立つ尾形安平翁碑

コラム

増補行程記

増補行程記は盛岡藩八代藩主 南部利視の命を受けて、同藩士清水秋全が寛延4(1751)年に描いて献上したものです。

江戸の日本橋から盛岡城下の中の橋に至る約140里(約560km)の奥州道中に沿って、宿駅、一里塚、並木などをはじめ、建物、名所、旧跡等が克明に描かれています。

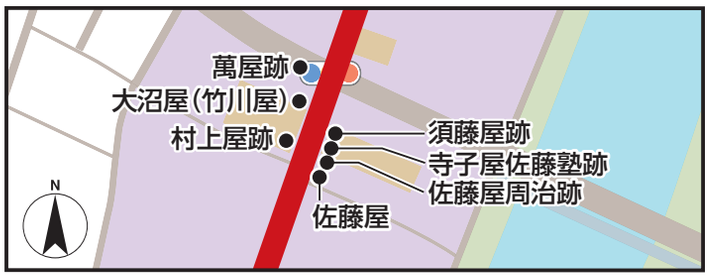
金ケ瀬宿付近から船迫宿までの街道には松だけでなく杉、漆が多く植えられていました。金ケ瀬宿も大河原宿も街道中央に中堰（水路）があったことが見え、また一里塚や大高宮、真言最勝院、禅宗判昌院（繁昌院）などの記載が見えます。

(もりおか歴史文化館所蔵)

大河原宿

金ケ瀬宿

④ 中央公民館周辺［豪商で活気のあったところ］
Around the Central Community Center-The place of rich business



間口が狭く短冊状の町割りに並んだ茅葺き屋根の店棚が続く宿場の一角。

ここで商売をしていた萬屋、大沼屋、村上屋、佐藤屋周治、佐藤屋は、嘉永5（1852）年鹽竈神社の表参道に一対の石燈籠を寄進するなど、活発に活動していた様子が伺えます。

The houses of the shops had narrow frontage facing to Osyu Kaido, that had thatched roof lined up in a strip-shaped town brock. Yorozu-ya, Ohnuma-ya, Murakami-ya, Sato-ya Shuji, Sato-ya , which operated shops in this area donated a pair of stone lanterns at the Omote-sando (main entrance road) of Shiogama-Shrine in 1852, (Kaei 5), which is an example of their prosperous activities.

（1）萬屋跡
The site of Yorozu-ya

竹川商店北隣の道路で軽便道路と言われた場所。萬屋大三郎の時代（1850年頃）に紅花問屋や味噌醤油の醸造業を営みました。

萬屋の子孫の田中哲郎氏が子供の頃に母親から聞いた話として「紅花問屋の商いで京都に出向いたときに、雛人形（享保雛）を買ってきたと言い伝えられています。」と話しており、京との交流が伺えます。

竹川商店（左）と萬屋

コラム　軽便道路

萬屋跡地に大正7（1918）年、軽便鉄道の発着場ができたため、軽便道路と呼んでいました。後に尾形橋を補強し、線路を延長し大河原駅前が発着場になり、大正11年には大河原ー遠刈田間が開通。やがて自動車の時代がやってきて、昭和12（1937）年軽便鉄道は廃止となりました。

（2）大沼屋（竹川屋）
Ohnuma-ya (Takegawa-ya)

農業のかたわら、醤油の醸造、呉服、紅花問屋を営みました。元治元（1864）年に大沼屋から竹川屋に改名、慶応年間（1865年頃）には柴田郡南方大肝煎を務め、慶応4（1868）年白石城が南部藩に引き渡された際には、立会人の一人として竹川重右エ門の名が記されています。

今でも北隣の道路から見ることができる3つ並んだ蔵は江戸末期（1865年頃）の建築と言われ、屋根はさや屋根、壁は漆喰壁となまこ壁で造られています。

竹川商店の蔵

（3）村上屋跡（阿部屋）
The site of Murakami-ya (Abe-ya)

現在のNTT敷地。宝暦(1751年頃）以降約80年間、源兵衛をはじめ4代にわたって大肝煎を務めました。

江戸期には阿部屋の屋号で農業のかたわら紅花やたばこ問屋を営みました。幕末の村上屋源七の時の天保12（1841）年には二百両を献金した賞与として柴田郡に一軒の許可と言われた清酒造りが許されましたが、弘化２（1845）年には免許が尾形安平に移りました。酒造りはほかに、禁制が緩やかな濁酒造りや酒糀造りがあり、記録には高橋屋忠助の名前もあります。

村上屋跡

(4) 須藤屋跡
The site of Sudo-ya shop

現在の中央公民館。農業を営みながら紅花、真綿、穀類を他領に出荷、さらに木綿や古着の仕入れ販売や酒造業を営みました。

江戸時代には郡内随一の資産家でもあり、鹽竈神社だけでなく、大高山神社にも立派な石の常夜燈や絵馬を奉納しています。

幸右エ門が宝暦8(1758)年藩に300両を献金し、藩から自分の持ち高のうち3貫文を知行として下付され武士の格式となりました。さらに献金や飢饉時の善行により家族まで絹布の着用（武士待遇）を許された後、名字帯刀を許されました。

須藤屋跡

コラム

古着と通貨の流通

庶民は呉服を新調することができず、古着を買うのが普通だったと言われる時代、お店で買った古着をつぎはぎして大事に扱い、毎日同じものを着ていたと言われています。また、この時庶民が手にしたお金は小判や一分銀ではなく、仙台藩でも鋳造していた寛永通宝という貨幣でした。寛永13(1636)年以降240年間にわたり、青銅・真鍮・鉄の3種の材料と形状の大小を組合わせて合計千種類もの寛永通宝が流通したと言われています。

(5) 寺子屋佐藤塾跡
The site of Terakoya (School) Sato-juku

現在の中央公民館駐車場。享和年間(1801～1804)、医師 佐藤玄節がこの宿場で初めて寺子屋を創設しました。天保2(1831)年には教師３名・生徒数90名を数え、大規模な塾でした。この塾頭 玄節は医者でもあり、教育・診察・投薬の仕事を兼務しており多忙であったと言われています。

佐藤塾跡

(6) 佐藤屋周治跡（佐周商店）
The site of Sato-ya Shuji（Sashu-syoten）

現在、佐藤屋の蔵が建っている場所。佐藤周治の先祖大村某は江戸時代後期に、佐藤屋と同じ山形県米沢から隣の佐藤屋を頼って奉公、のちに支配人となりました。さらに周治の代に佐藤屋の別家となり独立し、荒物・金物・食品などの雑貨商を営みました。その後、佐周商店の名で商売をしました。

佐藤屋周治跡（現在佐藤屋土蔵）

(7) 佐藤屋
Sato-ya

佐藤屋の初代が、山形県米沢の小出村を出て須藤屋に奉公。須藤屋の勧めで「山米」の屋号で独立し、呉服業を営みました。

嘉永3(1850)年頃に醤油醸造を創業し、その後平成までヤマコメブランドの味噌・醤油を広く流通させました。

佐藤屋

❺ 観音堂周辺［史跡の多い街道の南口］
Around Kannon-do; The South entrance of Osyu Kaido with many historic sites

この付近には宿屋や茶店が並び、月6回の定期市が開催され、観音堂では多くの旅人が休憩するところでした。角田・亘理道に分岐する上の渡しがあり、金ケ瀬宿へと続く松並木のある往来の激しい通りでした。

There were inns and teahouses in this area, and regular markets have been held 6 times every month. Many tourists took a break at Kannon-do. There was a pier of ferryboats crossing Shiroishi River which connects to roads to Kakuda and Watari, and it was a busy street with a row of pine trees leading to Kanagase-syuku.

(1) 佐々庄
Sasasho

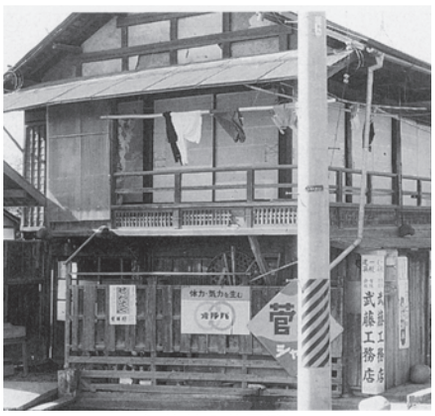
現在表通りに建つ佐々氏の店蔵は大正年代に建設したもので、江戸時代の佐々庄の商売に関しては不明ですが、この店蔵の建設時に掘った井戸から市神の文字が彫られた石碑が出てきました。ここで掘り出された市神は江戸時代のものと推測されたため、今でも大切に邸内でお祭りしているとのことです。

佐々庄

(2) 旅籠茶屋清跡　The site of Hatago (Inn)-Chaya Sei

通りを挟んで旅籠大兵の向かい側に建っていた旅籠茶屋清も江戸時代に建設された二階建ての旅籠でした。二階の廊下にはしゃれた格子の手摺をもつ構造に昔ながらの面影を残していましたが解体されました。

茶屋清跡


解体前の茶屋清

茶屋清の二階廊下

(3) 旅籠大兵跡　The site of Hatago (Inn) Daihyo

旅籠大兵は観音堂の隣にあり、通りに面した旅籠は江戸時代末期(1864年頃)に建設されたと言われています。入母屋造、屋根は和釘で止めた木羽葺であり、出入口はくぐり戸のついた内側につり上げる巾1間のしとみ式の戸がついておりました。二階は3方に半間巾の廊下が外に張り出し、彫刻が施された木鼻が廊下の下から支える構造でした。また、一階南側軒下には半間幅の濡縁があり、旅人がゆったり旅の疲れを癒せる所だったと言われています。

大兵跡(左)と観音堂

建物調査時の復元図

彫刻された木鼻

(4) 大河原宿南口　The South Entrance of Ogawara-syuku

宿場の南口には、木戸番が防犯等の目的で朝晩戸締りをしていた木戸がありました。旅人がこの場所に立つと宿場の大きさや宿場内の様子を直感的に把握できたと言われています。

(5) 観音堂
Kannon (God)−do

如意輪観音堂は元禄年代(1700年頃)、「大源」と呼ばれた大泉源十郎が勧請しました。後に、観音像が盗難にあい、明治初(1868)年頃隣地で大兵を営んでいた大庭兵七が新たに本尊（木造金箔塗り、光背を含めた高さが80cm）を安置しました。境内には建立された石碑が18体もあり、一番古いものは正徳2(1712)年の山神像です。町内に現存する石碑はこの頃から急増したと言われ、建碑するだけの時代的社会的な背景が熟し始めた時期だと言われています。

観音堂本堂と石碑群

コラム　観音堂の御本尊

本尊として祭られている如意輪観音は、その名のように車輪が転がるように、意のままに出現して衆生を救済してくれる観音菩薩だと言われ、人々の厚い信仰を受けています。今でも祭には子供神輿や提神楽などの奉納があり、賑やかな如意輪観音祭典が開催されます。

(6) 上の渡し跡
The site of the upper pier of a ferryboat crossing Shiroishi river

鮭・鮎が豊富といわれた白石川の西岸にそそぐ支流（現在はコンクリート製暗渠）を少し遡った現在の裁判所近くに渡船場がありました。ここから大谷村の角田・亘理方面へ通じる主要な通路に渡ることができました。

上の渡し跡付近と蔵王山

(7) 一里塚跡
The site of mile stone

一里塚は、慶長9(1604)年、徳川家康が江戸日本橋を起点として、主要街道の両側に1 里（約4km）毎に5間（約9m）四方の塚を築かせ、塚の上には松を植えて目立たせ、籠代の基準や旅人の道しるべとして使われました。次第に荒廃してしまい、ここの一里塚も明治初年に切り崩され水田となりました。今では、はたらく館（シルバー人材センター）が建っています。

一里塚跡と金ケ瀬宿方面

(8) 松並木跡（上町～金ケ瀬）
The site of Row of pine trees (Kami-machi – Kanagase)

宝永5(1708)年幕命により、参勤交代制によって発達した全国の主要街道筋に並木の植え立てを指示され、金ケ瀬宿までの約3kmの区間には松を植栽し、伐採の厳禁や継続的な整備を行い、幕末には見事な松並木に生長させました。

松並木(上町～金ケ瀬)

コラム

大河原宿の商人が鹽竈神社に奉納した石燈籠

鹽竈神社参道には、全国からの商人たちによる石燈籠が建立奉献されていますが、わが町からも次の10名の名が見られます。嘉永5(1852)年の銘があり、表参道上方4段目に左右1基ずつ建立されています。

これらの10人は、当時の大河原宿における商人のすべてではありませんが、代表的な商人であったことは確かです。

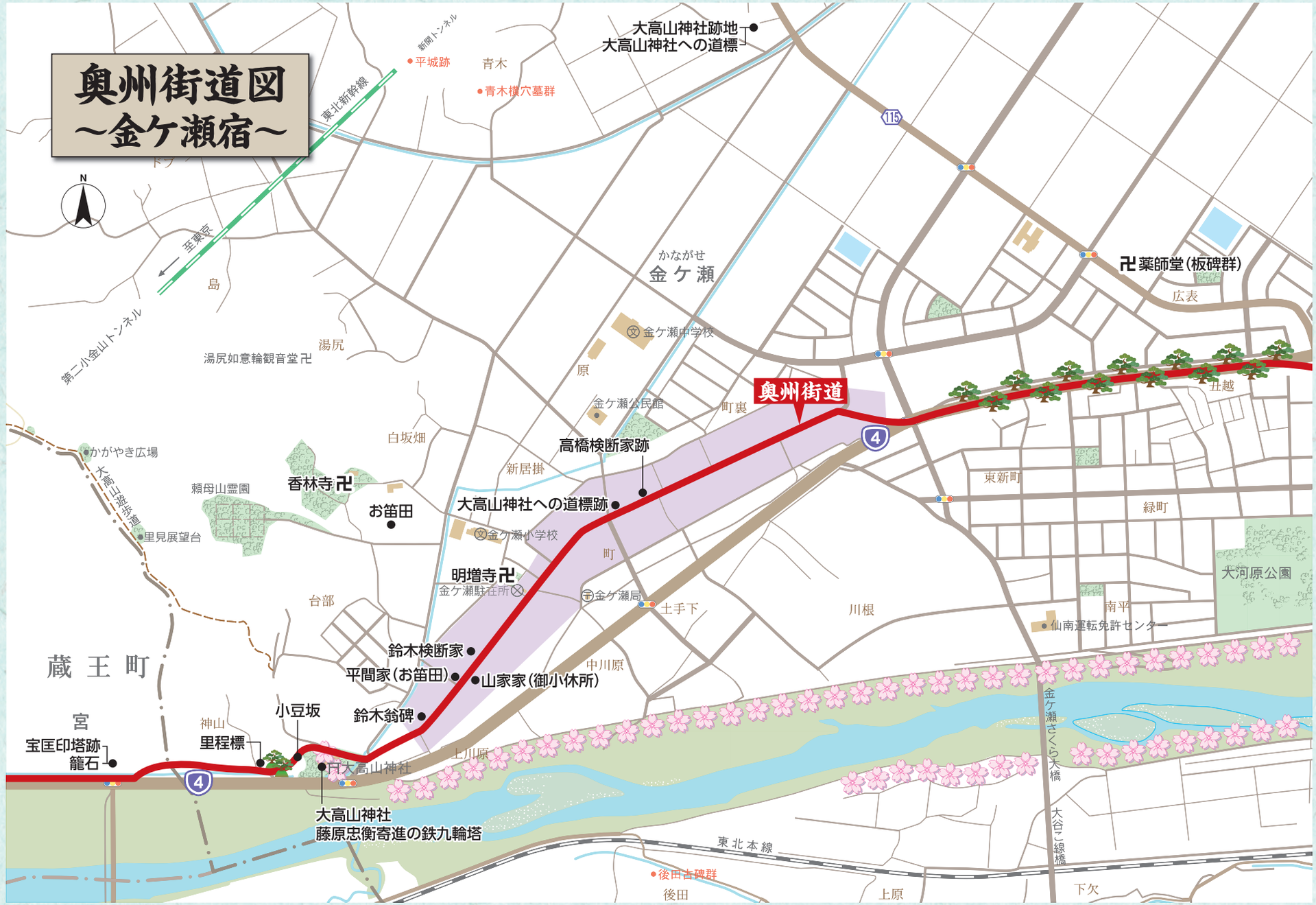
嘉永五壬子歳　五月吉祥日
大河原町
岩間屋庄蔵　高橋屋忠助　萬屋大三郎　高山屋庄吉　尾形屋政治
大河原町
村上屋源兵衛　大沼屋重右ェ門　大泉屋源兵衛　佐藤屋権右ェ門　佐藤屋周治

鹽竈神社表参道

表参道上に向い左

表参道上に向い右

奥州街道図
～金ケ瀬宿～


N
東北新幹線
至東京
新関トンネル
平城跡
青木
青木横穴墓群
大高山神社跡地
大高山神社への道標
115
薬師堂（板碑群）
広表
かながせ
金ケ瀬
金ケ瀬中学校
島
湯尻
湯尻如意輪観音堂
第二小金山トンネル
原
金ケ瀬公民館
町裏
奥州街道
丑越
4
白坂畑
高橋検断家跡
新居掛
かがやき広場
大高山神社参道
香林寺
賴母山霊園
お笛田
大高山神社への道標跡
東新町
緑町
里見展望台
金ケ瀬小学校
町
明増寺
金ケ瀬駐在所
金ケ瀬局
土手下
大河原公園
台部
川根
南平
仙南運転免許センター
鈴木検断家
蔵王町
平間家（お笛田）
山家家（御小休所）
中川原
小豆坂
鈴木翁碑
宮
神山
宝匡印塔跡
里程標
上川原
大高山神社
金ケ瀬さくら大橋
籠石
大高山神社
藤原忠衡寄進の鉄九輪塔
大谷こ線橋
東北本線
後田吉碑群
後田
上原
下欠

❻ 金ケ瀬下（新町）地区［宿駅の役割を担った平村の移住］
Kanagase Shimo (Shin-cho) area: Emigration of Taira-mura for an inn station

江戸時代、奥州街道は大河原宿南口の一里塚から始まる松並木が両側に並び、30町（約3.3km）先の金ケ瀬宿まで続いていました。街道の北側には田畑が広がり、南は畑とその先に白石川。西に向かう旅人の目には、頼母山などの里山とその背後に霊峰蔵王の峰々を眺めながらの道中であったでしょう。

In the Edo era, the Osyu Kaido was lined with pine trees on both sides starting from the the milestone of Ogawara-syuku at Kami-machi, Shin-cho, and continued to Kanagase-syuku, for about 3.3km. The agricultural fields spread out on the North side of the way, and on the South side were the fields and Shiroishi River ahead. Tourists heading to West could enjoy the view of village forests such as Tanomo-yama Mountain and the peaks of Sacred Zao Mountain behind

（1）薬師堂（板碑群）
Yakushi (God of Medicine)-do (Stone plate monuments)

国道四号線から新開に入る道路添いに、杉木立に囲まれた小さな祠があります。これが薬師堂です。コンクリート製の堂屋の中に、石造りの仏像が鎮座しています。文明年中（1469～1487）の大干ばつの際に、高橋豊茂なる者（高忠家祖）がこの堂に籠もって雨乞い祈願を行い、雨を降らせたという故事に因んで「雨乞い薬師」とも言われています。境内には鎌倉時代の文保・元亨・嘉暦（1316～1334）などの元号が銘刻された板碑13基が建っています。その他に鎮火供養塔や馬頭観音などの石碑も見られます。

薬師堂

（2）大高山神社への道標
Signpost to Ohtakayama Shrine

奥州街道金ケ瀬宿の中央付近に、新開の大高山神社への道標石が設置されている様子が、「増補行程記」の金ケ瀬宿の中に描かれています。時の流れの中で街道筋から薬師堂の前に移されました。その後大高山神社が神山に移ったあと、新開の人たちにより現在の地に移されています。この道標石は、正面に「大高宮」、側面に「大高山 至青根遠刈田」の文字が刻まれています。

大高山神社への道標

(3) 香林寺
Korin-ji Temple

金ケ瀬台部の竹嶺山香林寺は、慶安2(1649)年に創建された曹洞宗の寺院です。香林寺には、大高山大林寺、丑越にある薬師堂、太子庵及び新寺の洞秀院も廃寺後に合祀、統合されています。洞秀院は文治の役(1189)に平泉軍の総大将として韮神山で奮戦死した照井太郎高直の位牌が安置されていて、勇将 照井太郎を慕って訪れる人も跡を絶たないようです。

香林寺山門

(4) 金ケ瀬新町の宿駅の役割
The role of Kanagase Shin-cho syuku Station

金ケ瀬宿が出来てから79年後の享保6(1721)年に、今までの金ケ瀬宿本町の続きに、宅地を造成して屋敷割りを行い、宿場町新町を築きました。藩ではここ新町に、平村の人頭・名子合わせて93人を強制的に移転させ、伝馬などの宿駅業務に就かせています。

現在の金ケ瀬新町

(5) 高橋検断家跡（新町）
The site of Takahashi Inspection House (Shin-cho)

享保6(1721)年以前の金ケ瀬宿は本町だけでしたから、金ケ瀬宿の検断は、本町の鈴木弥五右エ門一人でした。享保6年に本町続きに新町を設立し、駅役を行なわせる新町検断所が誕生、以後2名の検断が置かれました。新町ができて最初の検断は長五郎でしたが、交代が激しく幕末のころには高橋伊蔵がつとめていました。金ケ瀬本町は、片倉藩の足軽を主とした45戸、新町は93件の伊達藩の百姓、毎月前半は本町が出役し、後半は新町が出役するという半月交代の体制をとっていました。

高橋検断家跡

(6) 金ケ瀬宿と平村
Kanagase-syuku and Taira-mura

もとの平村の場所は、今の金ケ瀬中学校のあたりから新開と薬師堂を結ぶ地域あたりまで拡がっており、これが新町に移住する前の屋敷跡でした。安永の風土記平村薬師堂の項に、薬師堂近辺に屋敷があったことが記録されています。

金ケ瀬宿と平村

コラム 宿駅の風物

宿駅の風物で特筆されているのは大河原駅の梨と金ケ瀬駅のザクロでした。梨は各屋敷内に四、五本ずつ自然仕立てに植えられていました。金ヶ瀬のザクロも駅中戸ごとに植えられていて、現在もわずかに見ることができます。

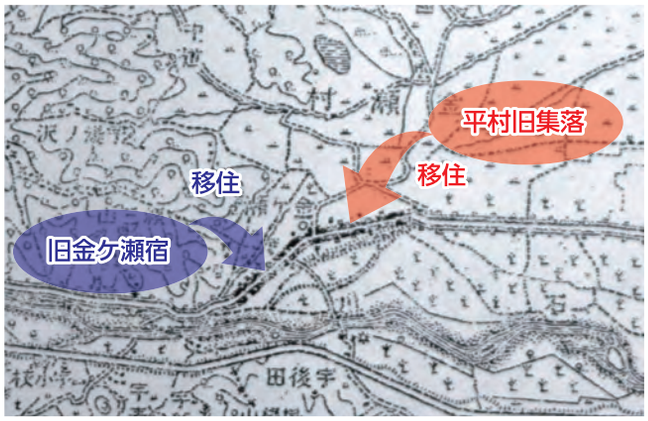
❼ 金ケ瀬上(本町)地区［金ケ瀬の地名に由来する地域］
Kanagase-Kami（Moto-machi）The origin of the name of Kanagase

金ケ瀬宿に入った奥州街道は、ほぼ現在の町並みの中を西へ、途中南西方向へ折れて進み、現在の大高山神社のある神山の急坂（小豆坂　赤坂）にたどり着きます。明治９年の明治天皇御巡幸の際に埋められるまで、道路の中央には中堀が敷設されていました。

In the Edo era, the Osyu Kaido was lined with pine trees on both sides starting from the the milestone of Ogawara-syuku at Kami-machi, Shin-cho, and continued to Kanagase-syuku, for about 3.3km. The agricultural fields spread out on the North side of the way, and on the South side were the fields and Shiroishi River ahead. Tourists heading to West could enjoy the view of village forests such as Tanomo-yama Mountain and the peaks of Sacred Zao Mountain behind

(1) 金ケ瀬宿の成り立ち　The origin of Kanagase-syuku

刈田郡宮村、現在の籠石辺りからニツ坂辺りにかけて、川辺にあったと思われる金ケ瀬宿が、寛永14(1637)年の大洪水の際に、宿場町全集落が押し流されてしまいました。宮村の地内に再興すべき場所が見当たらないので、領主の片倉重長が、藩主 伊達忠宗に請願して、柴田郡平村の畑地を拝領して宅地とし、寛永19(1642)年、平村の地内に金ケ瀬宿場が再興されました。40数軒の小さな宿場町であり、御伝馬、即ち乗り継ぎの出役などの業務もできかねる状態にあったことから、金ケ瀬宿の人々が宿駅業務の改善を度々お上に願い出ました。そして、金ケ瀬宿が出来てから79年後の享保6(1721)年 に、今までの金ケ瀬宿本町の続きに宅地を造成して屋敷割りを行い新しい宿場町、新町を作りました。ここに平村の人頭・名子合わせて93人を強制的に移転させ、伝馬などの宿駅業務に就かせ、残った34件は宿場町裏に住んだままで宿駅業務に就くように申し渡されたのでした。



金ケ瀬宿

(2) 検断鈴木弥五右エ門彰徳碑
Monument of Inspection SUZUKI Yagouemon

金ケ瀬駅の検断 鈴木弥五右エ門の彰徳碑が字町３番地に建っています。彰徳碑は「翁姓は鈴木氏、知直という、俗称、弥五右エ門　その先祖は郷士たり。永禄年中金ヶ瀬に移住しその駅吏となる。」という書き出しで始まり、困窮した金ケ瀬宿を救った功績を後世に伝えたものです。鈴木家の系図によると、その先祖 鈴木美濃は永禄2(1559)年に、刈田郡宮村から金ケ瀬に移住して検断の職に就き、天正8(1580)年まで21年間勤めたようです。以後子々孫々に至るまでこの検断職を世襲し、知直の代に至って石碑に記されたような事績を挙げたと言われています。知直は19歳で検断を継ぎ、宿駅の疲弊を見かねて代官に訴え、30両を得て宿場の窮を救い、かつ下賜金の4分の1を運用してその利子で宿場人夫を潤したのでした。

鈴木翁碑

鈴木検断家

(3) お笛田
Ohueda（paddy）

金ケ瀬の西、頼母山の麓にあるカトリック保育園の西隣に「お笛田」と言われる所があります。昔、橘豊日尊（後の用明天皇）が東夷征伐の折、陸奥に行幸し、凱旋の際に玉笛を残し、それを平間家の先祖、加賀が「お笛田」で発見して平間家の家宝としました。寛政10(1798)年、伊達家9代 周宗公に献上して苗字帯刀御免の御墨付をもらったと伝えられています。

お笛田

平間家

(4) 明増寺
Myouzou-zi Temple

金ケ瀬小学校前に建つ光沢山明増寺は、浄土真宗本願寺派のお寺で、もともとは原囲い（現在の金ケ瀬中学校地内）にあったものを明治23(1890)年に現在の場所に移転したものです。幕末には12世の秀巌、秀山父子が寺子屋を開設して多くの子弟を教育し、仙南有数の寺子屋としてその名が知られたといいます。今もその当時の机が残っており、当時の寺子屋の様子を偲ぶことができます。

明増寺

(5) 山家家（明治天皇の御小休所）
Meiji Emperor's rest place Yanbe family

天保年代、山家伝蔵は肝入を勤め、紅花と青苧問屋として早くから関西地方と商売し、さらに白石片倉家の金穀御用を承り、米穀の売買に携わっています。また、明治天皇の東北御巡幸の際に、金ケ瀬字町 山家佐市方が御小休所となっています。山家家が御小休所に選ばれたのは、藩政期、殿様のお泊まり所でもあったからです。御小休所となった山家佐市宅では、便所や厩舎の新設から住宅内外の修理をして行幸に備えました。

山家家

⑧ 金ケ瀬郡境［村境の史跡］
Kanagase-gun border (historic site of village border)

金ケ瀬宿の町並みを通り抜けた奥州街道は、現在の大高山神社のある神山の急坂（小豆坂　赤坂）を登り赤茶けた土の坂を下っていきます。坂を降りた辺りに金ケ瀬宿の一里塚があり、その先に刈田郡との境、稲荷神社を祭る籠石へと道は続いていきます。

Osyu Kaido passed thorough Kanagase-syuku, went up the steep slope of Shinzan (Azuki-zaka Akasaka) where the current Otaka-yama Shrine is located, and went down the reddish earthy slope. At the end of the hill, there was a milestone of Kanagase-syuku, followed by a road leading to Kagoishi that celebrates Inari Shrine, the border with Katta-gun.

(1) 大高山神社 Otaka-yama Shrine

大高山神社は、敏達天皇が即位した敏達元(571)年に日本武尊を祭神とし、新開の台ノ山に創建されました。左大臣藤原忠平がまとめた延喜式には、国から貢ぎ物を受ける全国 285 社の一社とされ、明治５(1872)年には郷社となっています。元禄3(1690)年に火災に遭い、翌年の元禄４(1691)年12月に新開の尾鷹に再建されています。この地で210余年鎮座した後、大正3(1914)年、奥州街道小豆坂の付近、現在の金ケ瀬神山に移転遷祠されました。後ろに大蔵王の山並みを控え前は白石川の清流にのぞむ風光明媚なこの場所に、新開の本殿など旧社屋をそのまま移転改築したもので、屋根は茅葺きから木羽葺き、そして今はトタン葺きに変わっています。国重要文化財の東北最古の鰐口(正応6(1293)年銘)、文治年間(1185～1189)藤原忠衡寄進の鉄九輪塔、江戸期の絵馬など貴重な文化財を多く所蔵しています。

大高山神社鳥居

大高山神社拝殿

(2) 藤原忠衡寄進の鉄九輪塔
Nine-story Pagoda donated by FUJIWARA Tadahira

奥州藤原家の三代目 藤原秀衡の三男、和泉三郎忠衡は、義経をかばった為に、四代目になった兄の泰衡によって殺されたのが文治3(1187)年のことでした。この忠衡は、かつて鹽竈神社に鉄製の文治燈籠を献納し、さらに大高山神社に鉄九輪塔を献納して祈願しています。安永の風土記書出には、高さ7尺、幅2尺5寸、台切石高さ3尺5寸、幅2尺4寸と記されています。鉄九輪塔は、九輪部分が欠損し、鉄製火袋の塔身部分だけが残され、鉄製の扉があり、中の正面に大日如来が彫りつけてあります。

忠衡寄進の鉄九輪塔

(3) 小豆坂
Azuki-zaka（slope）

古くは東街道、そして江戸時代の奥州街道における我が町の難所は小豆坂（赤坂）で、明治天皇の東北御巡幸日記に「金ヶ瀬の西に赤坂とて土石皆赤き坂あり。この坂を下れば仙台まで平地なり」とあります。今は大高山神社の裏参道となってわずかに往昔の面影を残しています。また文治の役で頼朝が、戦国から江戸の世に政宗が、そして奥の細道をたどる芭蕉も登り下りしたこの赤坂は正に歴史の道で、奥の細道の面影を今にのこす貴重な箇所と言えます。

小豆坂

(4) 里程標
Milestone

江戸時代、日本橋を基点に里程の目安として一里（約４km）毎に塚を設置しました。金ケ瀬神山にも赤坂の登り口付近に一里塚の小丘がありましたが、今は畑に変わっています。

またこの里程標は、明治22(1889)年仙台から10里（約40km）の距離に設置されたものです。上部は折損していますが「明治二廿二年四月設宮城縣」「距仙臺元標十里一↑」「陸前國柴田郡金ヶ瀬村」と刻まれていました。

里程標

(5) 籠石
Kagoisi

柴田・刈田の郡境に程近い刈田郡宮村向山籠石は、地名の由来となった奇石・巨石が路傍に連なっています。烏帽子石の窟に棲む狐を稲荷神として祭ったと言われています。籠石稲荷の隣には、修験道の南宝院という寺院が寛永年間(1624～1644年)に開山し、別当も常住していましたが、明治期に廃されました。

籠石

(6) 宝匡印塔跡
The site of the Houkyouin Tower

天保15(1844)年に、籠石稲荷の狐に助けられた御礼と伝えられている、京都の紅花問屋林屋と吉文字屋、これに協賛した江戸の紅花問屋によって、籠石に豪壮な宝匡印塔が建てられたましたが、今は宮の蓮蔵寺に移転され、霊場はなくなっています。

蓮蔵寺の宝匡印塔

資 料 編

(1) 大河原の戊辰戦争の様子　Boshin War in Ogawara

Both Ogawara and Kanegase were post towns and most of the inhabitants were farmers, so they did not become battlefields in the Boshin War or were rushed out as soldiers. There were confusions and hassles, such as 3,230 Sendai clan officers camping

江戸期の大河原も金ケ瀬も奥州街道の宿場町で、住民のほとんどが農民でしたから、戊辰戦争の戦場になることも兵士として駆り出されることもありませんでした。ですが、宿駅が故の混乱やあわただしさはありました。そのことが町史や旧家の古文書に遺されています。

大河原町史の記述を紹介します。

慶応4(1868)年4月11日昼下がりのこと奥州街道韮神の松並木を一団の騎馬武者が大河原の方へ砂塵をあげて駆け抜けていった。やがてこの一団は大河原駅（宿）の旅館高山屋の門前で馬をおり庭に入って行った。間もなく高山屋から手代が駆け出し、人々の出入りがにわかにはげしくなったと思う間に、それが駅中にも津波のようにひろがっていった。

藩主伊達慶邦公はこの日、討会軍将兵3,230人を率いて、岩沼の御泊り館を出て槻木にて午餐後、大河原駅高山屋に御宿陣することになったからである。(「仙台戊辰史」)

(略）藩主を迎えた大河原駅は大混乱を極め、駅中将卒と軍馬に埋まって、騒々しい一夜をむかえた。(略）明けて12日錦旗2旒(りゅう)を押し立てた大部隊が堂々と進発し村民群集してこれを見送ったがその隊列は先頭が金ケ瀬村に入ってもまだ上川原の松並木の間に見えかくれしながら延々と続いた。

次に金ケ瀬の旧家に遺る古文書「慶応四戊辰、稼穡(かしょく)日用録」の概要を紹介します。

慶應4(1868)年

3月28日　先鋒伊達筑前（登米）殿大河原泊まり　郡村へ軍用金の莫大な割付や毎日の駅継ぎ人馬で嘆くに堪えない

4月13日　屋形様（仙台藩主）大河原御出達総勢一万人（仙台戊辰史3,230人）と云う。

4月26日　南部藩の加勢鉄砲組6､7百人大河原立ち。

4月29日　米相場が下落した。　白石城下が日々混雑している。

閏 4月12日　米沢候２千人程の軍勢で通った。

8月22日　仙台藩は軍用金の地金を買い上げ、諸氏三百年来の御報恩と思い買上を申し出た。
米の価格が下がった。

9月20日　屋形様（仙台藩主）降伏謝罪。

10月28日　謝罪吟味のため屋形様、御曹子様大河原御出、江戸へ向かう。
極々御倹約、切棒の御駕籠。

11月晦日　官軍の往来には権を震い横行の振舞　田野に白鳥を打ち旅宿に非行、農家へ入り鶏をくびりとり、歩人を打抑へ或は討殺すなど数々の仕方なり。

と当時の事が書かれております。詳しくは大河原町史をご覧ください。

会津藩境に向けて出陣する仙台藩兵の様子を記した木版画（仙台市博物館所蔵）

(2) 浅草宇一朗（戊辰戦争に関わった大河原出身の目明し）
ASAKUSA Uichiro (Police detective during Boshin war, from Ogawara)

ASAKUSA Uichiro was a hero from Ogawara, who broke down the betting ground at the night festival and went out of Ogawara. After that, he became a police detective in Fukushima. During the Boshin War, he was involved in the murder of a government army staffer, SERA Shuzo. This incident was a turning point in the Boshin War.

浅草宇一郎［1818年～1892年］像（福島市長楽寺所蔵）

上町の観音堂

① 大河原からの出奔

大河原出身の任侠で上町の観音堂の夜祭りの際に特別に開かれた賭場で賭場荒しを斬り付けるという事件を起したと言われています。

浅草は、罪に問われるのを恐れてか、大河原から逃亡しました。その後、所々を逃げわたり新潟に数年間住んだ後、福島に来て見回り役 江口佐十郎の食客（居候兼用心棒）となりました。

② 福島で十手持ち

嘉永初年頃、浅草はその能力を郡の代官の村西三郎左衛門等に見込まれ、嘉永3(1850)年頃に福島の町の見回り役を申付けられました。浅草は懸命に役目を果たしました。

その後、福島で旅館「浅草屋」を営み相当の子分を持つ親分になって、福島藩の目明しを兼ねていました。

コラム

目明し

武士には犯罪を取りしまる役割がありましたが、犯罪者の生活の様子などを詳しく知る事は困難でした。

そこで捜査の必要上、やくざ者や犯罪者の一部を味方につけて情報収集のため使うことがありました。

③ 戊辰戦争と仙台藩

仙台藩ははじめ官軍側に属し、会津藩を討伐するよう命じられていました。

しかし、薩長出身者の威張った態度や会津討伐の正当性に疑問を持つ藩士が多く、藩内の考えはまとまっていませんでした。

また、会津に同情する気運から、会津と戦いながらも会津を救済し和平への道を探ろうという試みが水面下で動きだしていました。

白石城跡（奥羽越列藩同盟の公議所が置かれた）

④ 世良修蔵斬殺事件

戊辰戦争中の慶応4(1868)年閏4月19日、奥羽鎮撫総督府下参謀であった世良修蔵が書いた同じ下参謀の大山格之助あての密書が露見しました。そこには「奥羽皆敵」と記されており、それを見た仙台藩士らの世良への怒りは最高潮に達し、世良を襲撃することになりました。その際、浅草は、大隊長仙台藩士 瀬上主膳に会い「当地にて召捕りものが在れば、我ら卑賤のものが先に当たります」と申し出て許され、子分19人を率いて襲撃に加わりました。

閏4月20日午前2時、軍事監察 姉歯武之進の指揮のもと9人を世良の宿泊していた「旅館金沢屋」に案内しました。

仙台藩士 姉歯武之進、赤坂幸太夫、福島藩士 遠藤栄之助らは寝室を襲い、赤坂は世良を襖もろとも叩き伏せて格闘となり、浅草が引き立て、旅館「客自軒」にて瀬上が取調べのうえ阿武隈川の河原で処刑しました。

福島市「金沢屋跡」

⑤ 惨殺事件その後

この事件は、仙台藩を中心とした奥羽越列藩同盟対新政府軍という戊辰戦争の転換を決定づけました。

浅草は、成功の一翼を担い自宅へ帰ると、早々に役目に従い事件の逐一を福島藩代官 富田善平に報告しました。

浅草は、代官 富田と協議の上、世良修蔵とその従者2名の冥福を祈って事件の後の6月、桑折無能寺に金3両を納めて供養し、明治2(1969)年には大河原の最勝院へも弔祭料を納めて、供養しました。

浅草は明治25(1892)年2月福島県知事 渡辺清に「世良修蔵殿遭難及び弔祭理由書」を差し出し、半年後に福島の自宅で天寿を全うしました。

行年75歳、墓所は大河原町の最勝院（西の寺）と福島市の長楽寺です。

大河原町最勝院（西の寺）

白石市　陣場山の世良修蔵墓碑

最勝院（西の寺にある浅草宇一郎の墓）

(3) 宿場町の役割と役人 The role and officials of the posttown

The main role of post towns along Osyu Kaido was to carry luggage and provide accommodation and meals for tourists. The officials were representatives of the Sendai feudal lords and representatives of the common people who supervised the clerical work, directed the common people, and supervised their duties smoothly.

宿場町の役目は荷物の輸送と旅人の宿泊、食事の提供でした。それらが十分機能するために、中心となる役人が置かれました。先ず大河原宿、金ケ瀬宿には今の町長に当たる肝入りの他に、宿場内の取り締まりと荷物の運搬の仕事を指示する検断という役職が常に置かれていました。大河原宿では上町、本町、新田町の3町があり（後に新町が新設）、それぞれに検断が置かれたと思われますが本町の高橋兵右エ門の他に源七、忠次郎、喜八、久四郎等の名前が見られます。金ケ瀬宿では、鈴木弥五エ門の家が代々引き継ぎましたが、新町が出来ると新たに選出されて二人制となりました。

奥州街道の宿場町には、人や荷物の運搬をする人馬が常に25人、25頭が置かれ、大河原宿、金ケ瀬宿にもこの程度の備えが常にあり、この人馬が控えた所は検断屋敷であったと思われます。

① 代官（だいかん）

藩士の中から推挙された代官は、それぞれの代官所で勤務していました。主な業務は、戸籍・租税・営業・備荒金穀・救済など一切の民生事務を直接庶民を相手に決裁しました。その中でも仕事の第一は年貢や税の収納であり、住民の争いを公平におし鎮め、訴えを取り継ぐことでした。また事件があればこれを調べて奉行に伝えることもありました。

② 大肝入（おおきもいり）

大肝入は、庶民が担当する最高の役職で藩から高五貫文又は年金五両が支給され代官所で事務をとりました。主な事務は、①肝入り・検断の指揮　②租税の取りまとめと送付等司法、警察の権限の一部を担っていました。大肝入の役職にあるものについては、自分の所有地についての税が免除され、諸役、諸郡役は無く、身分は庶民であっても名字帯刀、絹・紬着用御免の特権が与えられていました。

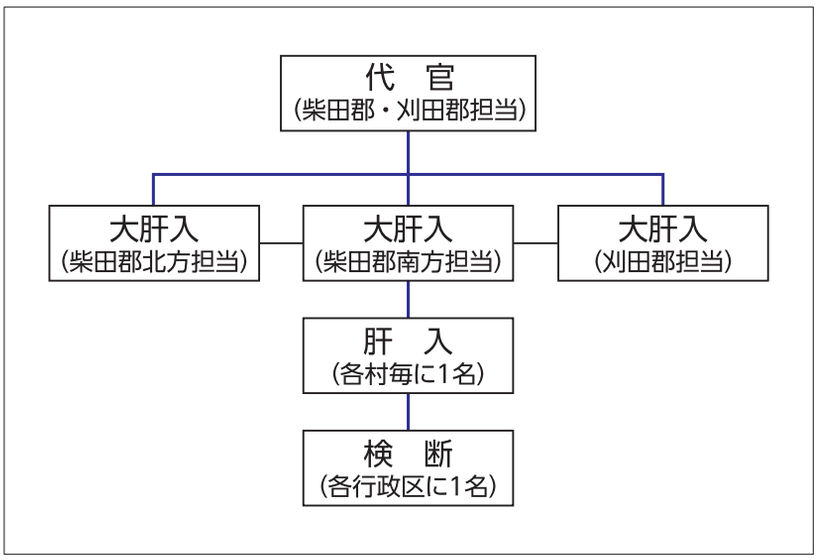
③ 肝入（きもいり）

各村毎に1名を村から選任して、自宅で事務をおこなっていました。その仕事は配下に大組（頭肝入の補助・租税督促・人足の出役）、組頭（五人組の長・肝入りの指達徹底）を置いて次のような業務を行っていました。①村内の物成検査　②租税の割り振りと徴収　③戸籍の整理　④道路・橋の普請具申　⑤庶民の願い・届書の連署申達などでした。

④ 検断（けんだん）

宿駅の行政区毎に1名の配置で、手代を置いて自宅で事務を行っていました。権限は肝入りと同じでしたが、その外に宿駅関係の事務一切を仕切っていました。検断は大肝入りの推挙によって任命され、いったん任命されるとその家が代々子孫まで引き継ぐことが多かったようです。また、労多くして報酬の少ない役でしたから、裕福な百姓でないと勤まらなかったのでした。

以上の役人を組織図にすると次のようになります。



(4) 神社境内の石碑 Monument on the shrine grounds

There are still many monuments from the Edo period remain in shrines and temples in Ogawara today. Many of them contain wishes of the common people at that time, and are valuable information of the life of the local people.

上町の観音堂境内には、住民の祈りや願いが込められた石碑がたくさん残されています。母親たちが子供の健やかな成長を願って建てた「子安観音」や、重機の無かった時代、田畑を耕したり荷物の運搬に無くてはならない馬が、元気に仕事をしてくれることを願ったり、死んだ馬の供養に建てた「馬頭観音」も沢山残っています。その中に、「市神」と言う50cmばかりに埋もれかけた一基の石碑があります。

① 市神（いちがみ）

今でも仙北あたりで互市と言って、道端でそれぞれに持ち寄った品物を売る習慣が続いている所があります。観音堂境内でもそのような市が開かれていました。自給自足の江戸前期は物々交換が主で、農家が作った作物、蓑や傘等の藁細工、鎌や鍬等の農具等を互いに欲しいものを交換し合っていました。

中期以降になるとお金での取引も可能になって、益々市は賑わいを見せるようになり、市神はその市の繁盛を願った人達が建てた石碑なのです。

この市は毎日開かれていたのではなく、大河原宿では3と8のつく日、つまり3、8 、13、18、23、28と月に6回開かれていました。金ケ瀬宿は5と10、船岡は4と8、村田は1と6とお互いに開催日が重ならないようになっていました。それは商う人は商品を持って所を変えることが出来、買う方は欲しいものが有る市に行けるというメリットがあったのです。

観音堂の他に上町の佐々家、本町の本田家にも在り、観音堂だけでなく市を開ける広い場所があればそこが商いの場所になっていたものと思われます。

市神

② 道祖神（どうそじん）

街道南口の観音堂とは反対に、北口に当たるのが古峯神社でした。現在の新田町と桜団地との境の6差路の信号機の辺りで、今は新田町生活センターに移転しました。多くの石碑の中に、男性のシンボルに似た道祖神があります。少々卑猥な物のように受け取られがちな石碑ですが、これは大河原宿にとっては無くてはならないものでした。

もともとこの石碑は旅をする人の安全を願って建てられたものですが、その他に街道の入り口に立って大河原宿の中に厄なものが入り込まないように「この宿にはこんなに大きな品物を持つ怖い大男が居るぞ」と脅しをかけていたのです。人殺しや盗人、天然痘や風邪等の流行病、火災や風水害などから宿場の住民を守ってくれていたのでした。

30cm程の小さな物ですが、所によっては大人の大きさほどのもあり、大きければそれなりの御利益があったとされていたようです。

道祖神

(5) 庶民を襲った災害 Disaster that hit common people

One of the headaches for common people was the annual tax, followed by an unexpected disaster. One of them was fire, especially in Kanagase-syuku, where many large fires occurred during the Edo period.
In addition, poor harvest due to bad weather led to the danger of the collapse of rural areas, including the deaths of many people.

① 金ケ瀬宿の大火

茅葺き屋根が多かった江戸時代には、ひと度火災が発生するとそのまま大火に繋がることが多く、それでなくても余裕のない生活を送っている庶民にとってはその度に悲惨を究めたようです。特に金ケ瀬宿では、ほぼ20年に一度は大火に見舞われて家を建てなおす暇が無いほどであったとういことです。
発生した時や焼失戸数は次の通りです。

- 享保10(1725)年2月　　焼失111軒
- 寛保元 (1741)年2月　　焼失180余軒 女一人焼死
- 明和　4(1767)年5月　　焼失203軒
- 安政　6(1859)年2月　　焼失　54軒

火災の発生時期は2月、5月と蔵王おろしのカラッ風が吹きまくる時期で、被害を大きくしています。明和年間(1764～1772)南部藩発行の「増補行程記」には「金ケ瀬　此宿藁家也　類焼多」と記されています。

火災の恐ろしさを痛感しての事でしょう、金ケ瀬の本町と新町に寺の住職が建てたという「鎮火供養塔」を建てて鎮火の祈願をしています。その石碑は今は薬師堂境内に1基残されています。

鎮火供養塔

② 天明・天保の飢饉

昔から東北地方では、10年に一度は冷害が起こると言われ、その都度庶民は悲惨な思いを強いられてきました。熱帯原産の米作に重点をおくがゆえの現象で、品種改良も進んでいませんでしたし、領内の食料は領内で賄い、他領から移出入することも出来ませんでした。そのため一旦飢饉ともなると目も当てられないほどの被害となったのです。

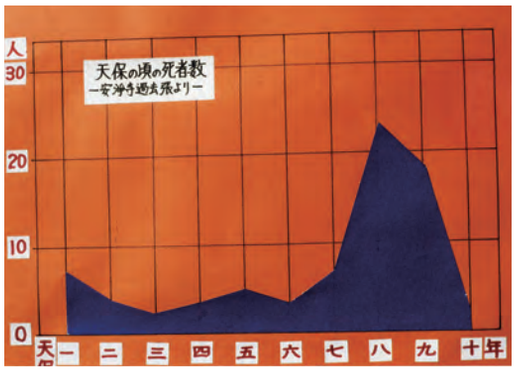
天明年間では、元(1781)年、2年には仙台領内は大水害を受け、3年には冷雨がひと夏続いて冷害となり、領内の餓死者十数万人を数えたという、いわゆる「天明の飢饉」が起きています。その時小山田村では、53戸の家が死に絶えたり夜逃げしたりで13戸にまで減ったということです。

それから50年後には、再び未曾有の大凶作の「天保の飢饉」がおきています。大河原宿の飢饉の様子は、大谷村の某寺の過去帳に詳しく記録されています。それらをまとめてみますと、先ず天保2(1831)年から9年までの天候と米の収穫を見ると、

- 天保2年　大雨　洪水　収穫なし
  大風雨のため堤防決壊　畑作皆無
- 天保4年　大風雨　冷害　大凶作
  6月でも単衣物の着物では寒い程
- 天保6年　大洪水　米の収穫半作
  7月大洪水で田畑が水に浸る
- 天保7年　冷害　米の収穫なし
- 天保8年　冷害　凶作
- 天保9年　冷害　凶作

過去帳

天保7(1836)年から9年までの3年間冷害続きで、各家庭で所有する食べ物を全て食いつくした住人は、野山の草木の茎や葉、根など口に入るものを捜し求め、それも無くなるとやがて栄養失調から餓死、または疫病による死亡者が続発しています。過去帳にも天保7～9年に急増していることが記録されています。



死者の推移

更に過去帳には「繁昌院檀家もあまた死す　疫死也」とあり大谷村だけでなく奥州街道沿いの住民も伝染病による死者が多かったことが分かります。大河原橋の下に三界万霊の石碑がありますが、これは飢饉で亡くなった人の供養碑で、町内の寺や神社の境内にも数多く見られます。

三界万霊碑

(6) 村の契約講 Village contract course

For ordinary people who never lived comfortably, some contract courses could save them. The role of the contract courses was to help neighboring residents by spending their labors and money on each other to support their lives, and to hope for healthy growth of their children, the health of their families, and good harvests.

江戸期の農民にとっては年貢等の負担が重く、その生活もかなり苦しいものでした。それに耐えるための手段としてお互いが助け合う相互扶助の組織が自然に発生していきました。冠婚葬祭、火災や風水害、建築や屋根の葺き替えに至るまでの扶助組織、つまり契約講がどの村でもつくられていました。この相互扶助の方法によって、貧窮の者もなんとか葬式も出せたし、生活も成り立っていたのです。

例えば、猫の手も借りたい農繁期の労力の貸し借りを「結(ゆい)」と言い、田植え、稲こきからもみすり、米つきに至るまでお互いに労力を出し合って仕事の能率を高めました。

また、村には信仰を目的とした「講」がありました。伊勢神宮の御伊勢講、古峰ケ原講や秋葉講、庚申信仰の庚申講の他、安産を祈る子安講や小牛田山神講等があったことは、町内の神社や寺の境内にある石碑から伺い知る事が出来ます。

頼母子講(たのもしこう)や無尽講は講中仲間の金融共済機関です。それぞれ決められた金を出し合ってくじを引き当てた人にまとめて融資するのです。形は異なりますが、福田村にあった「福田七福家屋無尽講」は、隣近所15軒だけの、家屋修理のための講でした。会員は毎年玄米3俵ずつ出し合い、合計45俵を15俵ずつ3軒に貸し出し、借りた家では換金して屋根ふきや台所、便所の修理に充てるのです。

自己資金だけではとてもできなかったことを講員のおかげで出来たのでした。5年間で全講員に行きわたったところでこの講は解散という仕組みでした。

契約講綴

(7) 仙南地方の紅花栽培 Safflower of Sen-nan(South Sendai) district

Safflower is material used for lipstick, dye, and painkiller, which was widely used in the area of Kyoto. The Domain of Sendai (Han) encouraged production of Safflower and established the protection policies. Safflower was cultivated in most villages in the Sen-nan (South Sendai) area because of its good quality and popularity, and as a source of cash income

「紅花一両、金一両」と言われるほど紅花は江戸時代は金と同等の高値で取引されるほどの貴重品で、婦人の口紅、鎮痛剤、染料等に使われていました。その紅花の出荷は仙台藩財政に貢献する度合いが大きく、御国産紅花として保護政策の対象になっていました。南仙台産の紅花は良質で、京都では珍重されたと言うことでした。中でも柴田郡産は南仙台産紅花の80%を占めるほどの特産物となっていて、これは農家にとっては現金収入の一つとなっていました。安政年間(1854～1860)の生産量は1300駄、1駄40両として約5万両もの出荷をしていたと言われています。(幕末の頃1両は今のお金に換算しておよそ30万円相当)

紅花は、仙南地区のどの村でも栽培され、それぞれ地区毎に問屋が集荷していました。白石・蔵王 地域は石津屋十郎右エ門、金ケ瀬地域は山家伝蔵、大河原地域は高橋屋忠助、村田地域は大沼屋養之丞、大沼屋庄治郎、山田屋新五郎、船岡は飯淵惣吉、川崎地域は小山長五郎、真壁喜三郎がそれぞれに出荷を行っていました。しかし、それでは藩としてどれだけ出荷しているかが把握できないことから、差配人がまとめて集荷、出荷することになりました。嘉永年間(1848～1854)になって大河原の高橋屋忠助がその任となって出荷から代金の決裁を一手にその仕事を引き受けることになったのでした。出荷は大河原から陸路で酒田まで行き、酒田から海路京都まで、又は大河原から陸路で江戸まで行き、江戸から海路京都へのコースでした。

紅花

登録有形文化財佐藤家住宅について

The Registered tangible cultural property Sato-ya residence

Sato-ya in Okawara-syuku was a brewer since the Edo period, and the family was a huge land owner of South Sendai area. The residence was registered as a tangible cultural property by the Japanese government. There are many things to see, which include design and materials used for buildings and gardens.

① 佐藤家の歴史

初代権右エ門は安永年間(1772～1780)に当時紅花や真綿、穀類を商って町内一の豪商であった須藤屋幸助の代に入店しました。その後暖簾分けをしてもらい須藤屋の屋号で呉服商を営み、やがて山形県米沢の出身であったことから「山米」の商号で独立しました。

嘉永3(1850)年4代目 源三郎の代に醤油醸造を創業し、佐藤屋の経営を発展させています。5代目 源三郎は経営活動の傍ら町議員や郵便局長を歴任、局舎は敷地内で現在の大河原町中央公民館駐車場のあたりでした。5代目は6代目源助(1866～1905)と共に農事改良や東北本線誘致活動への投資、教育・福祉・文化等の公益活動への寄付を積極的に行い地域に貢献しました。

7代目 源三郎(1901～1970)の代には味噌の販売は東北一円のほか東京にまで販路を広げ最も繁栄しましたが、平成の時代になり醸造業を廃業しています。

源三郎の長男 源貞氏は、アンテナ技研㈱の経営の傍ら上智大学名誉教授として埼玉県に在住、9代目の源之氏は仙台市在住で東北大学教授をし、実質的に佐藤屋邸宅の管理に当たっています。

佐藤屋邸表門と店蔵

② 現在の佐藤屋邸

佐藤屋邸の建物や庭等の10ヵ所が文化財としての価値が認められて、平成29年6月28日に国指定登録有形文化財として登録されました。その10ヵ所とは、店蔵、延命蔵、表門及び外塀、主屋、新座敷、住宅家塀、井戸屋、五行稲荷社、神宮小社、鳥居で、ここではその一部を紹介します。

店蔵、延命蔵は何れも二階建で、外壁はなまこ壁と漆喰塗りで仕上げられ、店蔵だけが表通りに面しており、事務室で、入り口に暖簾が下がり、客との応対が行われていた所です。

表門は薬医門の形式で、仙南随一の素封家としての風格を持つ店蔵と共に当時の繁栄を象徴しています。薬医門は昭和14年に居宅と共に建て替えられたもので、石の土台に太い柱が４本立ち上がっています。

門をくぐって玄関までの庭は、御影石とごろた石が敷きつめられ、赤石、青石が置かれ、それらが樹木と左の板塀とが相まって何とも言えない落ち着きがあり、日本庭園の素晴らしさを醸し出しています。

2棟の土蔵の裏には、これとほぼ同じ幅で中庭形式の主屋が東に続いています。主屋の平面は、中庭を囲むように東西南北の4つの棟からなり、玄関のある南棟のみ1階建てで、他は全て2階建てになっています。前庭に面した3つの和室のほか、家族の団らんの場であった娯楽室や応接室の2つの洋間、2階には客の寝室とされた3つの和室。それに主人の寝室があり、何処からでも中庭や邸内を見下ろすことが出来る造りになっています。

佐藤屋邸玄関

佐藤屋の庭

その外に主屋は台所や女中部屋等を含めて30もの部屋から成り立っています。主屋の東には間口5間で平屋の新座敷が離れとして設らけれています。明治35年頃の建物で、かつては多くの客をもてなしたり家族の結婚式や葬儀の会場として使われたとされています。それだけに、襖には金や銀の模様の入った緞子（どんす）が張られ、広い床の間や茶室などが設けられています。

敷地の東側、白石川堤防沿いにある五行稲荷は、明治32年に4代目源三郎が屋敷神として建てた物です。仙台の職人による龍や唐獅子などの彫刻装飾が豊かに施されて見る者の目を引きつけます。

何れ佐藤屋邸は、かつての奥州街道の風格を今に伝える町唯一の建物として、今後末永く保存されるべき建物であることは誰もが認めるところです。

屋敷神の五行稲荷社

佐藤屋プロジェクト紹介

佐藤屋邸の歴史的、文化的価値について見直すとともに活用について考えようと、平成23年1月に及川義行さんが町民有志に呼びかけて「佐藤屋邸の活用を考える会」を発足。その後「佐藤屋プロジェクト」と改名し、毎月定例会を開催して会員の意思疎通を図りながら目的に向かって活動しています。

東日本大震災で一時中断しましたが、及川さんが 町内の旧家に何度も足を運んだ集結の成果として、同年11月に「震災によって再確認された町内旧家の書画・工芸品・古文書展」を開催したところ、予想を超える来観者でした。その後、春には「雛まつり」、一目千本桜の桜まつりには「お休み処」として秋には町内の文化人、芸術家の作品、残された遺品等々の「企画展」を定例化して開催。町内外の方々から佐藤屋邸と展示品の素晴らしさを見ていただきました。また、会員も発足当時は9名でしたが今は22名となり、会員同志の歴史・文化的な知識を深めるため近隣及び県外の遺産を視察等を行っています。

平成29年6月に佐藤屋邸は「国登録有形文化財」に登録されたことを励みにして、貴重なこの文化遺産をどのようにして後世に引き継いでいけばいいのか等、会員は一層の研鑽に励んでいるところです。

佐藤屋プロジェクト会員

あとがき

この2年間の当会の秋の事業「企画展」では、「戊辰戦争と大河原」「大河原の奥州街道」と江戸時代を中心にすえて取り組んできました。とは言いましても、何分歴史に関して素人集団で、ご覧になられた方々にとっては物足りなさを感じたのではなかったかと思われます。「企画展」を基にして更に調査研究に取り組んで来ましたが、今この冊子のページをめくって見ると、大河原の町並みの様子や庶民の家庭内の様子等を彷彿とさせるにはまだまだ遠いように感じます。これに懲りずこれらの課題に一歩でも近づけるよう会員一同取り組んで行きたいと考えています。つきましては、各ご家庭に保存されてある古文書や日用品等、どんな物も結構ですのでお知らせ下さいますよう切にお願いいたします。

また、冊子の内容で間違っている事や、ご存知のことがあれば是非ご指摘いただければ幸いです。

最後になりましたが、この冊子発行にあたりご支援いただきました多くの皆様に心より感謝を申し上げてあとがきとさせていただきます。

令和２年３月

佐藤屋プロジェクト

「奥州街道 大河原宿と金ケ瀬宿」編集委員会

委員長　渡辺 常男

副委員長　及川 義行

委　　員　佐藤 源之・齋藤 英夫

尾形　彰・大友 廣一

小野 公禎

参考文献

『大河原町史（通史編、諸史編 年表）』大河原町

『大河原の史跡見て歩き』大河原町教育委員会

『写真に見る大河原町誌』大河原学生会OB編

『大河原小学校百年誌』大河原小学校創立百周年記念事業委員会

『奥州南仙台紅花物語』高橋忠助著

『柴田郡誌』柴田郡教育会

協力（敬称略）

大河原町教育委員会、大河原町生涯学習課、仙台市博物館、宮城県公文書館

もりおか歴史文化館、福島市長楽寺、株式会社 ユーメディア

伊藤俊明、遠藤慎一、尾形順一郎、熊谷十三子、佐藤光一、鈴木宗弘、高橋孝三、田中哲郎

松並木（上町～金ケ瀬）

佐藤屋プロジェクト 結成10年記念誌
「奥州街道 大河原宿と金ケ瀬宿」

発行年月日	令和２年3月
発　　行	佐藤屋プロジェクト 〒989−1236 宮城県柴田郡大河原町字東原町13−10
ホームページ	https://www.satouya-project.com/
印　刷　所	株式会社 津田印刷

表紙　柴田郡全図絵図
宮城県公文書館所蔵